-C R-

魔狗羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
－ＣＲ－

【Ｎコード】
Ｎ５３７２Ａ

【作者名】
魔狗羽

【あらすじ】
人間が架空世界へ入り込める研究が成功した。それを用いてゲーム制作をしたラインサンド研究所。だが、システムは完璧ではなかった……！？ゲームの主人公となったシトとリークが最重要アイテムであるカードを駆使して物語を進めていくカードゲームアドベンチャー！

第０話：　プロローグ（前書き）

こんにちは、魔狗羽です（＾Ｏ＾）／
すみませんが、この小説は＞改行制限無し＜で読んで下さい！
それでは、ごゆっくり（＾＿＿）ー☆

第０話：　プロローグ

とある研究室に取り付けられている巨大なモニターに、現実の世界のような都市や森林が映っている。ただ一つ違うのは、その映像の中に大きい物から小さい物まで、得体の知れないモンスターが沢山いることだろう。

ここはラインサンド研究所。

そして今、新感覚ＲＰＧ－ＣＲ－の開発中だ。といってももう完成の一歩手前くらいで、システム確認の段階に入っているのだが。

「もうすぐですね、所長」

「ああ……このＣＲさえ売れれば我が研究所も超一流の仲間入りさ…」

「ですが所長、これには一つだけ不確定要素が…」

「ふん、心配するな。十中八九あれが起こることはない。時間が時間だからあれの敵対ソフトは作れなかったがな」

「ま、まあそこまで運が悪いとは言えませんしね」

ＣＲ－－－－ＣＡＲＤ．ＲＰＧの略だ。

機械の技術が著しく発展した現社会では、電子知能の超収縮や架空世界の細部までの模型化等、今まで不可能とされていたことが次々と可能になり、それぞれが色々な機能の手助けになって、日本は全

世界の中でも最先端の技術を駆使し、再び高度経済成長期へと突入していった。

しかし、まだ実現不可能とされているものも多少ある。

その中の一つが”Ｐ．Ｖ．Ｒ（Ｐｌａｙ．Ｖｉｒｔｕａｌ．Ｒｅａｌｉｔｙ）”だ。簡単に説明すると、よくＳＦの世界であるような＞自分が架空世界へ入り込む＜というものだ。

だが、数ヶ月前、この”Ｐ．Ｖ．Ｒ”について研究していたラインサンド研究所が遂に”ファヴォナ粒子”を用いてこの技術を完成させたのだ。

誰よりも早く”Ｐ．Ｖ．Ｒ”の完成型を作ったラインサンド研究所は、その発見自体の情報料を売るのではなく、それを元にした何かを作ろうと考えた。

そこで出来たのが”ＣＲ”である。

ＣＲは、ゲームである。

まずこのＰ．Ｖ．Ｒ技術を使ってプレイヤーをゲーム－ＣＲ－の世界へと入り込ませる。そして、自分がＲＰＧの登場人物となり、プログラムされた範囲内の行動でゲームを進めていくのだ。

この技術の発見から数ヶ月しか経っていないが、最新のプログラム技術を持ってすれば、何千万単位のプログラムがそのくらいの期間で出来上がってしまうのだ。当然ながら、シナリオ等を考える時間も含めて、である。

では、ＣＲの”Ｒ”とは”ＲＰＧ”の”Ｒ”だが、ＣＲの”Ｃ”、つまり”ＣＡＲＤ”とはどういうことなのだろうか。

それは、ゲームの内容に深く関係する。なので、その疑問と共にこのゲームのストーリーについて少し触れておこう。

人間がこの世に現れたのと同時に、この世にその人間の一番最初の所有物として２０枚の小さい紙が天から降ってきた。
そしてそのうちの３枚を人間が天にかざすと、３匹の動物が現れた。
その動物のうち１匹は、角が１本生えた紅い犬。
２匹目は羽を６枚持つ蒼い小鳥。
３匹目は透き通るように白い妖精だった。
しかし、人間と敵対する者として、他の動物が現れた。
人間は３匹の動物達と臨機応変に闘った。
そして、その動物を倒した時、動物が光に包まれ、次の瞬間、動物は小さい紙となっていた。
その動物も天にかざすと、現実に現れるが、３匹以上は一度に呼び出せないらしい。
因みに紅い犬の名をタクロス、蒼い小鳥をフォーリヴァム、白い妖精をトゥルナ、と言うらしい。この３匹は、小さい紙ーーーーカードが生活の主力となっている現代社会では、伝説的な存在だ。
主人公は、当初この伝説の３枚を求めて旅に出るのだがーーーー

設定上の神話を含め、簡単に説明するとこうなる。

そう。しつこいようだがＣＲはそんな架空世界に入り込める夢のよ

うなゲームなのだ。

だが、このゲームの完成直前まで、全く気付かなかった問題が発生した。

複雑なプログラムにファヴォナ粒子を組み込むと、粒子の強さにプログラムが削られ、バグが発生する可能性があるのだ。しかも今回ファヴォナ粒子と直接関わるのは現実世界と架空世界を繋ぐプログラムだ。バグが発生すれば架空世界に閉じ込められたり、プログラムと共にプレイヤーへの大きなダメージも考えられるだろう。

「大丈夫さ、神は我々に最初にファヴォナ粒子を発見させた。このままなら、我々は神に守られたままだよ」

自信に満ち溢れているこの台詞ーーーーラインサンド研究所の長、ラプジスだ。

「そうです…よね…。明日の発表会も神に守られていれば大成功ですよ」

「ああ……ウィンフ君。君は私の側で一番よく働いてくれたね。当然、君と一緒に表彰台に上がるつもりだよ」

「本当ですか！所長！ありがとうございます！」

そして、翌日ーーーー。

「本日は、わざわざ私達の為にお集まりいただき、誠にありがとう

ございます。実は今日、今まで不可能とされていた一技術について、
重大発表があるのです――――

第1話：　友達

［＞抽選、当選のお知らせ＜おめでとうございます！あなたは新感覚ＲＰＧ－ＣＲ－の最初のプレイヤー達５０人の中に選ばれました！一週間後、ラインサンド研究所へお越しください！］

……当たっちゃったんだ……。

朝起きて、郵便受けに新聞を取りに行ったら…これが入ってた。

少年－－－－シトは一ヶ月前、ある雑誌にのっていた＞新感覚ＲＰＧ先取り体験キャンペーン！＜と書かれた抽選に暇潰しで応募していたのだ。それが当たったとは……。

まあいいか。何か予定があるわけではないし…。調度夏休みの真ん中で退屈していたのだ。

一週間後－－－－

「母さん、ちょっと出掛けてくる！」

「どこ行くの？」

「遊び遊び！行ってきます！」

都会から少し外れた所にある我が家から、大が付くような都会のど真ん中にあるラインサンド研究所までは歩きで３０分とちょっと。

あ、因みになんで俺がラインサンド研究所なんて場所を知っているのかというと、学校の体験学習で＞バーチャルの世界について＜とかいうので行ったことがあるからだ。

朝早くに家を出た為、研究所に着くのが昼前になってしまった。幸いここが都会なので、すぐ近くにあるファーストフード店で昼ご飯を食べることが出来た。

注文したハンバーガーをカウンターに置いて食べていると、隣にいた男（といっても自分と同じくらいの年齢だが）が話し掛けてきた。

「君もラインサンド研究所の抽選に当たったの？」

「君も…って…じゃあ…」

「うん。俺もだよ。俺はリーク。リーク＝ストロヴェルダ」

背はあまり高い方ではない。色白で白髪の少年だ。白や青を基調とした服を着ていて爽やかだ。そして何より目が輝いている。

「そっか。俺はシト。シト＝クランヴァートだ。よろしくな！」

「よろしく。ところでさ、ゲーム…っていうかイベントの内容とかって知ってる？」

「え……いやただ＞新感覚ＲＰＧ＜としか知らないけどさ…」

「なんか噂だと今日のイベントはＰ．Ｖ．Ｒの完成型発表会と、それを用いたゲームをやるらしいよ？」

「P・V・R……？」

「簡単に言うと、機械が創りだした架空の世界に入り込めるんだよ」

「え！？マジで！？うお何それすげー！」

「でも……あくまでも噂なんだけどね、そのP・V・R技術の一部分の問題が未解決のまま、今日のゲームで使われようとしているらしいんだ…」

「何それどういうこと？」

「なんかさ、バグるかもしれないんだって。で、もしバグったら架空世界に閉じこめられるとか…」

「な…マジかよ…」

「ま、まあ噂だしね…大丈夫だよ！心配ないって！……あ、もうそろそろ時間だから行こうか」

ラインサンド研究所大ホール――――

会場は、自分達と同じ当選者数十人や、マスコミらしき人達で混み合っていた。

「発表って本当にP・V・Rの完成なのかな…？」

「どうだろうね……あ、始まるみたいだよ」

ホール全体が暗くなり、中央のステージにいる人物――ラプジス＝ラインサンド博士とウィンフ＝モンボート博士の二人に照明がしぼられた。

ラプジス博士は、うろ覚えだが体験学習の時に会った記憶がある。清潔、というより不健康そうな白い白衣と光る眼鏡が印象的で、第一印象は冷徹なイメージがあった。が、学生の自分達に親しそうに話し掛けるラプジス博士は、優しいお兄さんを思わせた。

「本日は、わざわざ私達の為にお集まりいただき、誠にありがとうございます。実は今日、今まで不可能とされていた一技術について、重大発表があるのです。実は私達は、研究を重ね、Ｐ．Ｖ．Ｒを可能にしたのです」

会場がどよめきに包まれる。

「私達はファヴォナ粒子を用いて、Ｐ．Ｖ．Ｒを完成させました。そして、それの応用である＞ＣＲ＜というゲームを作ったのです」

またも会場全体にどよめきが広がる。

「本日、このゲームの…Ｐ．Ｖ．Ｒの最初の体験者として、５０人が選ばれました。これから彼等に、この＞ＣＲ＜を体験してもらいましょう。…では、私はここに残るので…ウィンフ君！彼等を特別室へ！」

「は、はい！わかりました！」

ウィンフ博士が急に話しを振られ、あたふたと受け答えた。

「それでは…抽選に当選した方は、こちらへ」

シトとリークはお互い顔を見合わせた。そして、どちらともなく歩きだしていた。

新たなる世界へ――――！

第1話：　友達（後書き）

こんにちは！魔狗羽です（＾Ｏ＾）
次話からこの＞後書き＜では作品中に出てきたカード（モンスター等）の説明をしていきたいと思います！もちろん毎回！
あと、物語にこういう人物を出してほしい、こんなイベントをやってほしい等の要望があれば、僕にメッセージを下さい！出来るだけ読者の皆様の期待に沿うようにしたいですのでｍ（＿＿）ｍ

第2話：　召喚

「これから皆さんにはカードを主としたＲＰＧをやっていただきます」

ウィンフ博士が言う。……カード？

「つまり…カードからモンスターを召喚し、敵や野性のモンスター達と戦い、お金を手に入れ、色々買い物をし、ストーリーを進めていく、というような意味です…。もちろん召喚したモンスターはちゃんと形として現れます」

……す、すごい！

「それではこちらの椅子に座って下さい」

そこには、およそ５０個くらいの、ぐちゃぐちゃと機械やその配線等のついた銀色の椅子が置いてあった。

「あ、一つ言い忘れましたが、向こうの世界についたら、二人一組のペアを作ってもらいますので…」

シトとリークは一瞬顔を見合わせ、そして頷き合った。

「それでは……ＣＲ起動。皆さん、いってらっしゃいませ」

ウィンフ博士の声と笑顔が……博士が何かのレバーを下げた瞬間に霞んで、見えなくなった。

……気が付いたら、全てが白の…上も下もないようなところに立っていた。リークや、他のプレイヤー達もいる。すると、前方に、黄色く光る文字が表れた。

［ＣＲへようこそ］

みんなその文字をただ呆然と見ている。

［二人のペアを作って下さい］

シトはウィンフ博士の言った言葉を思い出した。＞向こうの世界に着いたら、二人一組のペアを作ってもらいますので…＜という言葉を…。

「リーク」

ー

「シト」

。二人の声が重なった。

「「よろしく！」」

他のプレイヤー達のペアも決まったらしい。

［ＣＲ－スタート。いってらっしゃいませ］

また、視界が霞み、音が聞こえなくなった。

……ここは…！？

シトはベッドの上で目覚めた。カーテンの開いた窓からの陽射しが眩しい。正面に掛かった時計は７：２５辺りをさしている。部屋は全体的にログハウスのように木で造られていて、大きさは…学校の教室の２分の１くらいだろうか。そのスペースに、ベッドや机等が置いてある。

すごい…！ここまでリアルに出来るものなのだろうか…！

机の上に、巾着袋を一回り大きくしたような布の袋が置いてあった。逆さにしてみると、色々なものが机に落ちた。

まず、これは…カード？テレフォンカードくらいの大きさの紙が……２０枚入っている。

それから、これも何に使うのかわからないが、厚みは板チョコ２枚とちょっとくらいで、カードを一回り大きくしたくらいの大きさの電子機器。画面やボタンが付いている。やはりゲームなのだろうか、横長のそれの上のところに、細長い穴がある。カートリッジでもを差し込むのだろうか。そして、その”カートリッジ”らしきものが袋から見つかった。

ここに居るままだとどうしようもないので、シトは窓と反対側に付いているドアを開けることにした。

ゲーム－ＣＲ－の最初の扉だ。

ドアを開けると、木の造りの廊下に出た。一方の端には下へ降りる階段があり、もう一方の端は＞ＴＯＩＬＥＴ＜と書かれた扉があっ

た。また、隣にも扉が一つ付いていた。
すると、その扉が開いた。そして……
「シト！」
「リークか！なあすごいなこれ！まるで本物だよ！」
「ああ…。ところでさ、机の上に布袋なかった？」
「ああ、あったけど…？」
「その中身さ、何だろうね…カードと機械…」
「うーん…わかんないけど一応持っていった方がいいかもな。RPGだしさ」
「だね。……じゃあとりあえず下行くか」

……1階。

「あら、シトさんにリークさん。おはようございます」
1階は大きなリビングのようになっていた。そこにある、大きな机に座っている体格のいい女の人が、いきなり話し掛けてきた。
「え……？なんで俺の名前を…？」

「何言ってるんですか。下宿人の名前を忘れるようなことはしません」

「え…じゃあ……僕達はここの下宿人……ですか…？」

「リークさんまで。２人して寝ぼけているんですか？」

「わ、わからないんだよ！あなたの名前やこの機械やカードのことが！」

「お…おいシト…」

シトが叫びながらカードを掲げた瞬間ーーーカードが光を放った。

「「う、うわ！」」

……目の前には、動物がいた。いや、動物ではない。……何だこいつ…？人間くらいの大きさで、右手に剣を、左手に銀色の盾を持った、鎧を纏った亀が、そこに立っていた。

「な……何だ…こいつ……」

「ああ、トーラですか。……それにしてもあなたたち、何があったかはわかりませんが、なにもかも忘れてしまったのでしたら、全てお話ししますよ」

シトとリークは椅子に座った。

「まず私の名前はヴェントです。シトさんとリークさんは１２年前、このウェンバス宿舎に捨てられ、他の住民と共にここまで育てられ

てきました」

ヴェントさんは少し辛そうな表情で言った。

「そ、それでこのカードは…こいつは一体なんなんだよ！」

ヴェントさんはシトのタメ語には慣れているようで、普通に返す。

「このカード達にはモンスターが宿っています。カードを掲げると、そのカードに宿っているモンスターが召喚されます。といっても1度に3体より多くは召喚できませんが。さっきシトさんが召喚したのはトーラというモンスターです」

「さっきのが……モンスター……」

二人はさっきのカードをよく見てみた。カードの真ん中に書かれた枠の中に、海中で剣を構えるトーラの姿が描かれていた。

「それで、この世界にはカードにまつわる神話があるんです。神がこの世界を創造した時ーーーー

第2話：　召喚（後書き）

モンスター名：トーラ

海の平和を守る為結成されたトーラ部隊。盾にはトーラの祖先であるとされるモンスターをかたどった彫刻が彫られている。スピードは遅いが、盾によるガードは簡単には崩せない。重く作られた剣の一撃も侮れない。

第3話：　仲間

ピピピピピ――――

「博士、この状態ならゲーム終了まで持ちそうですよ」

発表会が終わり、ラプジス博士とウィンフ博士は機械室で話していた。

「そうか…よかった…」

ラプジス博士が安堵のため息をついた、その時だった。

ピピ…ピィィィギィィィ……

「な、なんだ！どうした！」

今までメインコンピュータの内部を写していた機械室のモニターが砂嵐になった。

「何！？どういうことだ！？」

「く、詳しくはわかりませんが少数のプログラムが破壊されたようです！」

「そんな……」

放心状態のラプジス博士に追い打ちをかけるように、ウィンフ博士が言いにくそうに言った。

「しかもこれがいつ向こうの世界に…ＣＲに影響するか特定出来ません」

「くそ……。仕方ない、我々二人で出来るところまでやってみよう」

あれから俺らはヴェントさんから色々な話を聞いた。神話の話。カードの話。袋に入っていた電子機器の話。

この電子機器、電子マネーだった。

カートリッジを穴に差し込み、電源を入れると＞３０００ｕ／０ｔ＜と表示された。

ヴェントさんの説明によると、ｕ（ユア）は一般的なお金の単位で、もちろん働くことでも増やすことが出来るが、カードバトルをした場合、勝った者の電子機器には＞ｕ＜がバトル内容相応に増やされるのだ。また、その時同時に増えるのがｔ（トス）だ。＞ｔ＜は普通のお金と違ってバトルに勝つこと以外では手に入れることが出来ない。このポイントは専用の店で物と交換することが出来るのだという。

そして最も俺達二人の興味をひいたのは、神話に出てくる伝説のカード３枚だった。タクロス、フォーリヴァム、トゥルノ……。

ヴェントさんと一緒に朝ご飯のトーストとベーコンエッグを食べながら、それらの話を聞き終えた二人は、最後にヴェントさんにここの家賃を聞いた。

「ああ、ここは１ヶ月２０ｕだよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「なあリーク。外でモンスター見てみないか？」

「あ、いいねそれ。…ごちそうさまでした。今日は色々ありがとうございました」

「いえいえ、また何かわからないことがありましたら何でも聞いて下さい」

ドアを開けて外へ出た――――そこは、この宿舎と同じような木の造りの家が数十件立ち並ぶ小さい集落だった。朝早いのに、多くはないが人も歩いている。

俺達は宿舎の裏に草むらを見つけ、そこでカードを見ることにした。

シトはさっき召喚したトーラのカードを取り出した。リークは２０枚のカードを順に眺めている。

「リーク早くしろよー！」

シトは早くバトルしたくて仕方ないのだ。

「う…ん…ちょっと待って……」

……その時、人の気配を感じた。

「ん…誰かいるのかぁ？」

がさがさと草むらを進んでいくと、一人の少女がカードを持って……モンスターを召喚しているのが見えた。

「あ、あの……」

「え、あ、こ、こんにちは！あの、二人共ここの人ですか？」

少女はかなり驚いたようで、大声で一気にまくし立てた。

「え…？いや違うけど…」

「じゃあ…現実世界から…？」

「ああ…てことは君も？」

「う、うん！私はラヴィア！ラヴィア＝サープ！よかった…仲間がいて…」

「仲間って……」

「ペアになった子がいなかったの。私、あそこのフェイム宿舎の下宿人なんだけど、大家さんにその子は昨日の昼に出掛けていったって聞いて、心細くなって……」

「そうなんだ……」

しばらくの沈黙……。するとシトがいきなり声を上げた。

「じゃあさ、俺達と一緒に行動しようよ！」

「え…いいの？」

「いんじゃね？なあリーク？」

「あ、ああ。いいかもね」

「あ…ありがとう！」

「ああ……ところでさ、さっきまで何してたの？」

「え……ああ、カードの召喚の練習だけど…」

「そうか……なあ、俺とバトルしないか？」

「おいシト…」

「うん……いいよ。私もちょっとやってみたかったし」

そう言ってラヴィアはカードをシトやリークのと同じ布袋から取り出した。

「よし……じゃあバトル開始……か…」

シトは２０枚のカードの中からトーラを選び出した。

第４話：　技（前書き）

前回の後書きで、いきなりサボってしまってすみませんでしたｍ（　）ｍ頑張りますのでこれからも－ＣＲ－をよろしくお願いしますｍ（　）ｍ

第４話：　技

カチャカチャ……

「くそ、どうなっているんだ！」

ラプジス博士とウィンフ博士の二人は、機械のあらゆる箇所を確かめてみた、この緊急事態の突破口が見えてこない。

「ですがまだ向こうの世界に影響は出ていないようです！」

「トーラ召喚！」

カードが光を放ち、目の前にトーラが召喚された。

「私も…ジュビラ召喚！」

ラヴィアのカードも光を放ち…モンスターが召喚された。

ラヴィアのモンスター…ジュビラ…。それは、手に鋭い鎌を持ち、黒いぼろぼろの布切れを羽織った死神のようなモンスターだった。目からは赤い光が放たれ、全身殺気立っている。

ジュビラが鎌をぶんぶんと振り回す。風を切る音がシトに伝わってくる。挑発なのだろうか…。

すると、トーラが挑発に乗ってジュビラに向かって突っ込んでいっ

た。

間合い、約2メートル。トーラは亀だからかスピードこそ遅いが、その重い剣の一撃が今にもジュビラに突き刺さろうとしている。だが、ジュビラは何もせずに立ったままだ。

「ジ、ジュビラ！逃げて！」

ラヴィアが叫んだが、シトはもう遅い、と思った。が……

トーラが剣を振り下ろした。ラヴィアは目をつぶった。しかし、剣はヒュオン、という音をたてて空振りした。

「な、なんで…。……！トーラ危ない！」

剣を振り下ろして固まっていたトーラの背後に、突然ジュビラが現れて、鎌を振り下ろした。

すると、いきなりトーラのカードがぼうっと青く光った。見てみると、今まで書かれていなかった文字が青く光っていた。

これは……技？

「聖域飛沫＞サンクチュアリ・スプラッシュ＜……？」

シトがそう言った瞬間、トーラが地面に片手をついた。すると、トーラが立っている地面の周りが円を描くようにひび割れだした。そしてゴゴゴゴ…と地響きが起きる。ジュビラの鎌がトーラに突き刺さる直前ーーーー

ひび割れたすき間から大量の水がトーラを囲むように噴射された。それはまるでトーラを包むカーテンのようだった。ジュビラはちょうど噴射された水に突き刺さり、水圧で遥か上に打ち上げられていった。

勝った…と思った。が、いつまでも打ち上げられたジュビラが落ちてこない。まさか…と思い、周りを見回す。……いない……いやいた！トーラの周りを高速で飛び回っている。目を凝らすとトーラの周りに時々黒いものが見えるのだ。

ずっとバトルを見ていたリークはジュビラについて考えてみた。トーラ程の防御力は無くても、スピードはかなり速い。さっきも一瞬でトーラの剣を避け、背後に回った。しかもジュビラは飛べるのだ。攻撃力は…まだわからないが。

それにしても、さっきのはなんだったんだ。シトがなんか言ったらそれに反応してあんな大技を……。

「よかった…ジュビラ…。……あ！何これ！」

シトが驚いてラヴィアの方を見ると、ジュビラのカードも青く光っていたのだ。

……つまり、相手も技を出してくる……。

「こ、これは…？煌電流死＞グリタースパーク・デッド＜…」

そうラヴィアが言った瞬間、やはりジュビラに変化が起きた。高速移動をやめ、距離を保ちつつトーラの正面に移る。そして最初やったように鎌を振り回す。すると、ジジジジ…という音と共に鎌に電

流が流れ始めた。そしてジュビラは鎌を思い切り振る。電流の固まりが遠心力で鎌から放たれた。

「トーラ……さ、聖域飛沫＞サンクチュアリ・スプラッシュ＜！」

トーラがさっきのように片手を地面につく。そして地響き。ぎりぎり電流弾がトーラに当たる寸前で水飛沫が上がった。

しかし、シトは忘れていた……水は電気を通す、と。

噴射された水に電流弾が当たり、弾く。同時に、電流が水全体に回る。水飛沫が無くなると、そこには俯せになって倒れているトーラがいた。

「トーラ！」

「勝っ……た…」

「シト……」

ぼろぼろのトーラが光に包まれ、消えた。トーラはカードに戻った。

第４話：　技（後書き）

モンスター名：ジュビラ

孤高の魂が獲物を求めて飛び続けている。そして、雷を纏った鎌で躊躇なく獲物を狩る。攻撃力とスピードはかなりのものだ。

技：煌電流死＞グリタースパーク・デッド＜

鎌に電流を発生させ、それを電流弾にして相手に飛ばす。

第5話：　属性

「…わからない…。一体どうすれば……」

ラプジス博士達はまだ機械の確認作業を行っていたが、一向に良くならない。すると、機械室のドアが開いた。

「あら、大変そうね、ラプジス博士。残念だけど、ＣＲと現実世界の間で事件が起きたわよ」

背は高く、白衣を来て眼鏡を掛けたいかにも科学者風の彼女が機械室に入って来た途端、ラプジス博士の目付きが鋭くなった。

「ラウムか。で、事件とは？」

事件、と聞いて内心かなり慌てたが、あくまで無表情で聞いた。

「あるマンションの近くにいた全ての人間が突然集団消失した。調べてみたところ、その中の数名がＣＲの観察モニターで発見された」

淡々と事実を述べるラウム。

「つまり…ゲーム内に引きずり込まれた、と……」

「そうね……で、これからが本題」

「なんだ？」

「私をゲーム内に行かせて。そこでプログラムを修復するわ」

「な…何を…！」

「あらいいじゃない。もし何かあってもあなたたちにデメリットはないんだし」

「……ウィンフ君、用意を……」

「は、はい！」

ウィンフ博士は、ラウムに論破され屈辱に満ちたラプジス博士の顔を見ることが出来なかった。

「はーっ！何だよお前！雷の攻撃技に水の防御技使うなんて！もしかして初心者？」

お互いのモンスターがカードに戻ると、草むらの陰から、髪を赤く染めたお兄さんが出てきた。服装も随分今風だ。

3人が固まっていると、赤髪のお兄さんはもっと呆れた表情をした。

「何お前らモンスターの属性も知らないわけ？」

「…あの、あなた誰ですか…？」

「え……ああ、ごめんごめん。俺はヴェナードだよ」

「そうですか…それで属性って……？」

「ん？おお、だからさ、モンスターには色々な属性があるわけよ。水や雷、炎とかな。それだけで多少バトルの優劣は生まれてくる。そして、モンスターだけじゃなく技にもそれぞれ属性がついている。今の場合、死神の属性は闇で亀の属性が水だったから、それだけでは対等だ。でも闇属性の死神が雷属性の技を出し、それを雷属性に弱い水属性の技で防御したから亀は負けた」

「そう…だったのか…」

「因みに初心者ならカードは初期のまんまだよな。そしたらほとんどの場合、２０枚の属性が揃ってるはずだぜ。亀のお前が水属性デッキで死神のお前が闇属性デッキのはずだ」

そう言われて、シトは慌てて２０枚のカードを見た。確かに水を連想させるようなモンスターばかりだ。

「私の……闇属性デッキだ！」

シトはカードをよく見てみると、重大なことに気付いた。モンスターの名前の横に＞水＜と書かれているのだ。わざわざイラストで判断する必要がなかった。

「リークのは？」

「……地属性…かな…」

シトがリークのカードを見ると＞地＜と書かれていた。

「あ、そうだ君達さ、もしかしてティスカヴトーナメントのタッグ

？」

いきなりヴェナードがさわやかに話し掛けてきた。

「ティスカヴ…トーナメント…？」

「なんだそれも知らないの？ティスカヴトーナメントってのは……うーん、実際見た方が早いかもね」

ヴェナードの目が悪戯っぽく光った…気がした。

「このリポーテルタウンのすぐ近くにティスカヴシティって所があるから、そこ行ってみ。そんじゃあまたいつか、ね」

そう言ってヴェナードは去っていった。

「あ…ち、ちょっと！」

3人はヴェナードを追い掛けようとしたが、彼が去りながら凄まじい殺気を放っていたので、立ち止まってしまった。

彼は、一体……？

しばらく呆然としていたが、リークが突然声を上げた。

「あ、もう11時半だ。一回宿舎に戻って昼ご飯食べようか」

腕時計を見ながら、多少強引に言った。

「あ、ああ、そうだな」

「じゃあ、1時にここに集合で！」

ラヴィアがそう言って3人は宿舎に帰ろうとした。……その時……

ガサガサ……

草むらの陰からモンスターが現れた。ゴリラを、人間の大人くらいに縮めたようなモンスターで、両腕には太く大きいタンクのようなものを装着している。

「な…なんだこいつ！？」

「野性の…モンスターよ…」

リークでさえ驚いているのに、ラヴィアは冷静だった。

「戦って倒すの！ジュビラ召か……？」

シトがラヴィアの手を掴んだ。

「待てって……リーク！今度はお前の番だぞー！」

「お、俺！？……わかった。……よし、ブレゼ召喚！」

リークはカードを選んで高く掲げた。

光を放って召喚されたのは、両手足からジャラジャラと鎖を垂らした、青い人型のモンスターだった。

ゴォォ……という唸り声と共に右腕のタンクが高回転を始めた。そしてモンスターが空を右腕で殴った。ビュオゥ、と音がする。何をする気だ、とリークが考えていると、薄く赤みがかった衝撃波がブレゼを狙っていた。さっきの殴り技で衝撃波を作り出していたのだ。

すると、やはりリークのカードが青く光った

「これが俺の……ブレゼの技……」

衝撃波がブレゼに迫る……！

「四重鎖力＞カルテット・チェーンフォース＜！」

ブレゼの両手足の鎖の先端がぽうっと光った。そのまま光った４箇所が空中に持ち上がる。ブレゼが独特のリズムで手足を動かす。すると４つの丸い光は凄まじい速さでモンスターに向かって飛んでいった。そのうち１つは衝撃波と相打ちになり、残り３つがモンスターを襲った。

ドォォン……

野性のモンスターとブレゼの戦いは、ブレゼの……いやリークの完全勝利に終わった。

モンスターが光に包まれ、消えた。そこには１枚のカードが残された。リークがカードを拾う。野性のモンスター……名前はラジィドだった。

第5話：　属性（後書き）

モンスター名：ブレゼ

地獄に堕ちた悪魔達に地獄に引きずり込まれた運の悪い少数のモンスター達。そのほとんどはそこでその一生を終えたが、ある1体のモンスターが地獄の長と取引をした。より多くの戦いをし、より多くのモンスターを地獄に堕とす、だから地上で戦わせてくれ、と。そして、地獄の長はそのモンスター…ブレゼに今までの数倍程の強大な力を与えた。また、地上に戻る際、両手足に鎖を付けられてしまった。

技：四重鎖力

＞カルテット・チェーンフォース＜

４つの鎖の先端に気を溜め、それを相手に飛ばす。

第6話：　経験

＞……次のニュースです。今日午後４時ごろ、ラミニシティのとあるマンション周辺にいた人間全員が突然消失する、という事件が発生しました。警察の調べによると、今日、ラインサンド研究所で発表されたＰ．Ｖ．Ｒ技術を用いたゲームの内部で、その何人かの姿が確認された、ということです。警察はＰ．Ｖ．Ｒ技術に問題があったのではないか、とラインサンド研究所の研究員を現在取り調べています。次のニュースです……＜

シトの母親、リントは家事も落ち着いて、ソファに寝転んでニュースを見ていた。

「すごい世の中になったものねえ……」

独り言を呟きながら、チャンネルを変えた。

「準備はいいわよ。さあ、お願い」

ウィンフ博士がラウム用に作った椅子のレバーを、ひいた――――

「お帰りなさい、お昼ご飯、ここで食べます？」

宿舎に戻ると、ミートソースの匂いが１階に立ち込めていた。

「え、いいんですか？」

「リークさん、何を……あ、ああ、食べれますよ」

ヴェントさんは俺達が”わからない”ことを忘れていたらしい。

「シトさん達、今日は誰か覚醒しましたか？」

「覚醒って…？」

「＞覚醒＜は自分が使ったモンスターが、新しい技が使えるようになることですよ。その時、そのモンスターのカード…特に技の文字の部分が青く光ります」

「「あ！」」

「トーラ…」

「ブレゼ…」

2人の声が重なった。

「モンスターは、経験の量に合わせて新しい技を覚えます。まあ、経験を積むごとに技は覚えにくくなりますがね」

経験を積んで、技を増やす……か。

「ああそうだ。シトさん達、本格的にバトルをする前にしっかり経験を積んでおきたいのなら、リポーテルタウンを出てすぐのヴィルタロードで野性のモンスター達と戦ってみたらどうですか？」

ヴィルタロード……。そこで沢山のモンスターに沢山の技を……。

「……いいねえ。リーク、早速行こう！」

「行こうってシト…ちょっと……」

リークがちらりとヴェントさんを見た。

「ああ私のことは気にしなくていいわよ」

「そうですか…それじゃ、行ってきます！」

１２時半……。

「大事なこと…忘れてた…」

ヴィルタロードに着いた２人は、ある約束を忘れていた。

『じゃあ、１時にここに集合で！』

……そう。ラヴィアとの約束である。

「どうしよう……」

「うーん……まあ、３０分くらいよくね？」

「でも……」

「時間に間に合えばいいの！ほらリーク、行くぞ！」

ヴィルタロードは、宿舎の裏の草むらとほぼ同じようだった。

すると……モンスターが草むらの陰から現れた。しかも今回は2体だ。

「来た……よし、トーラと……ゼフィン！」

シトはカードを2枚抜き取り、高く掲げた。

召喚されたのは、剣と盾と鎧で武装した亀……トーラと、狼が二足で立っているようなイメージを抱いてしまうゼフィン。

ゼフィンの格好は”未来都市”を連想させるようなもので、銀色のその毛をガチガチと何かの機械が覆っている。そして腰にはピストルやライフル等、ミリタリー系の物がささっている。これで本当に水属性なのだろうか…？

それに対して、相手も見た目だけではよく解らないモンスター達だった。1体は雲に魂が吹き込まれたようなモンスター。大きさはティッシュケース4個分くらいで、モコモコしている。もう1体は、2mくらいあるだろうか、大木に両手足をかたどったと思われる4本の枝がついた木のようなモンスター。頭には大量の葉っぱ。

シトがCRに来てからの第2戦が……始まった。

第６話：　経験（後書き）

モンスター名：ラジィド

古代の世界に突如として大量出現したゴリラ達。それらを大量捕獲し、生物実験を行ったジレイルタワー。前々から法に反する生物実験には度々自然保護団体から注意をされているが、この凶暴なゴリラについては何も言われなかった。
そして１年後、ジレイルタワーは実験を重ね、究極型にまでなった＞実験Ｎｏ．２４７６＜を完成させた。……生物殺戮兵器として。
ジレイルタワーはこの実験対象生物達を＞Ｌｕｇｅｄ＜と名付けた。

技：打空紅波
＞ナックル・レッドソニック＜

空中を殴るような動作で衝撃波を発生させる。この衝撃波は高速で右回転している為、左回転の物に当たると威力は落ちる。

第7話：　光陰（前書き）

すみません！この小説は＞改行制限無し＜で読んで下さいｍ（＿＿）ｍ

では、ごゆっくり（＾＿＾）ー☆

第7話：　光陰

2体VS2体、か……。
シトは先制攻撃を仕掛けるべく、ゼフィンのカードを見てみた。
……！初めから技が書いてある！これは……
「試してみるか……ゼフィン！水撃＞ウェーブシュート＜！」
ゼフィンが腰にさしていたライフルを取った。そして相手を……いや違う。相手の目の前の地面を狙って、パシュン、と撃った。
2体の敵の調度中間くらいの地面に弾が当たった。すると、弾が弾け…いや爆発し、水が鋭く飛び散った。まるで氷のように。
水にささり木のモンスターは結構ダメージを受けているみたいだが……雲のモンスターには気体だからか全く効いていない。
「よし…先に木を倒すか…ゼフィン！水撃＞ウェーブシュート＜！」
またゼフィンは2体の間くらいのいいところに撃ってくれた。
だが、地面に弾が当たる前に、木のモンスターに変化が起きていた。
ドキバキッ！！
「な、なんだ！？」
よく見ると、枝だったはずの足らしきものが異様に多く、そして太

くなっていた。

……そう、地面に根を張ったのだ。

弾が地面にあたる直前、木のモンスターの目の前に大量の根っこがドキバキドキッ！という音と共に現れた。弾はその根っこに当たり、爆発したが、縦に太く生えた根っこに邪魔されて、敵への効果は無かった。

さらに雲のモンスターが反撃に出た。ふわふわ、とこっちに近づいてくる。そして雲のモンスターの中心部分だと思われる紺色の小さく丸いぷよぷよした心臓部分のようなところを中心に、ギュルギュルと左に高速回転し始めた。そして黒ずんだ雨水のようなものをこっちに向けて、すごい速さで、台風のように集中攻撃した。

「トーラ！聖域飛沫＞サンクチュアリ・スプラッシュ＜！」

地響き……そして、噴射。間一髪で攻撃をモロに喰らうことは避けられた。が、油断は出来ない。お互い、敵の攻撃を防ぎ合って、これで振り出しだ。

今度は木のモンスターが攻撃体制に入った。

先程と同じく、ドキガキバキ！と音がして、根を張った。何をする気だ……と思ったが、すぐに本能的に危険を察知し、それが当たっていたことがわかった。

木のモンスターは、大量の根を壁にすることなく、バキッッドキッッ！と地中に入ったり出たりを繰り返しながら、かなり広範囲での串刺し攻撃を繰り出したのだ。

まずい……これではトーラの聖域飛沫でも防ぎ切れないだろう。一体どうすれば……。

ぽうっ……。

ゼフィンのカードが……光った！慌ててシトが読み上げる。

「水柱囲撃＞シューティング・ドーム＜！」

ゼフィンが腰からさっきのライフルよりも長い銃を取出した。そして……上に向かって弾を放った。

ささる…！と思った直前、撃った弾が頭上で爆発し、降り注ぐように薄く青みがかった透明の、ドーム状の壁が出来て、シトとリーク、トーラにゼフィンを囲った。

ガキッギィィンッ！

まるで家が一件まるごと潰れたような音が響く。……ゼフィンの作ったバリアは、鋭い大量の根を防ぎ切れたようだ。

すぐさま反撃すべく、水撃、と言おうとしたが、このままではゼフィンが疲れてしまう、と思い、シトはトーラに向かって叫んだ。

「行け！攻撃だ！」

トーラは剣を構えた。が、また木のモンスターが根を張った……

いや、あれは根ではない……刺（とげ）のついた緑色のつるだ。

そして……トーラがヴォゥッと小さい悲鳴をあげた。見ると、トーラの右足につるが巻き付いている。しかもきつく縛られて、刺が足に食い込んでいる。あれでは、動けないだけでなく、足に重いダメージを受けるだろう。

「くっそ……ゼフィン！水撃＞ウェーブシュート＜！」

ゼフィンの疲労を承知の上で敵に攻撃した。しかし、また根っこの壁で弾かれてしまう。

「く……野性でこんなに強いのかよ……」

今度は雲のモンスターが動けないトーラに向けて、放電を始めた。

まずい…。シトはヴェナードから聞かされた＞属性＜を思い出していた。雷攻撃は水属性に強い…。つまり、このままではトーラは倒されるだろう。ゼフィンのバリア技も効かないはずだ。

負ける……！

そう思った時……。

「四重鎖力＞カルテット・チェーンフォース＜！」

４つの光がジャラジャラと鎖を引っ張りながら飛んできた。１つはトーラの足に当たり、つるは破壊された。そして、あとの３つは雲のモンスターが放った電流と相打ちになった。

「人のバトルに割り込むのは反則かな……」

リークが微笑みながら近付いてきた。ブレゼも一緒だ。

「リーク……」

「地属性が何に強いかなんて知らないけど、全力を尽くすよ？なあ、シト？」

「あ、ああ……ありがとな……助かったよ…」

数秒の沈黙……。

「「さあ、やるか！」」

が、どういう訳か、あれほど攻撃的だった2体が、背を向け、こちらから離れ始めた。敵が増えたからだろうか……。

「な…なんだよ……」

「う、うん……あ！もう50分だよ！早く行かないと！」

レグナタワーの最上階。モニターからシト達と野性のモンスターとの戦いを見ていたヴェナードは口を歪めた。

「ふ、凄いな…。ケルヴォとクラモの2体の攻撃にあれだけ持ちこたえられるとは……。まるで初心者離れした強さだ。くっく…シトにリークか……」

さっきシト達と話した時と別人のような声と仕種(しぐさ)で、ヴェナードは

笑った。

第7話：　光陰（後書き）

モンスター：ゼフィン

見つからないように極秘にマートオオカミを生物実験したジレイルタワー。元の攻撃能力が高いマートオオカミに銃等のハイテク機器を装備させた結果、マートオオカミに”水の力”を感じ、水属性にする方向で更に研究を進め、＞Ｚｅｆｉｎｅ＜が誕生した。

技：水撃
＞ウェーブシュート＜

初めから使える、そこまで強くはない技。非常に固い水を飛ばし、それを爆発させ、破片でダメージを狙う技。

技：水柱囲撃
＞シューティング・ドーム＜

空中に弾を放ち、空爆させ、ドーム状のバリアを張る技。トーラの聖域飛沫よりも固く、範囲も広いが、この技を出すことによって消耗する体力は、こちらの方が多い。

第8話：　大会

リントは1人で遅めの夕食をとっていた。

「シト、遅いわね……」

夫のシミロもまだ帰ってこない。まあ、彼の勤める会社の通常帰宅時間が普通の会社よりも遅いのはわかるが……。

リントは妙な胸騒ぎを感じていた。

……ついた。私はベッドに寝ている。ラプジスの言った通りの始まり方だ。

ふ、本当に勝つのは私よ、ラプジス……。

ラウムは1人静かに笑った。

「あ！2人とも遅いよおー！」

ラヴィアが大きく手を振っている。

「はー、はー…ごめんごめん」

「ま、早めに来てジュビラの技1つ覚醒させたからいっか」

…？

「ラヴィア…覚醒知ってるの？」

「え、うん、さっき宿舎の人に…」

……情報の収穫の時間がこっちとほぼ同じだ。やはりゲームだからだろうか…。

「へえー…。…ところでさ、これからどうする？」

リークの問いにラヴィアが反応した。

「あ、それならさっきのヴェナードって人が言ってた＞ティスカヴシティ＜ってところに行ってみる？すぐ近くらしいし…」

シトはヴェナードの真っ赤な髪と、彼に教えてもらった属性のことを思い出した。

「ああ…いいかもな」

ヴェントさんに作ってもらったこの周辺一帯の地図によると、ティスカヴシティに行くには、さっきシトが木や雲のモンスター達と戦ったヴィルタロードを通って行くらしい。

「あんな強い奴に何度も会ってらんないよ…」

と、シトは思わず漏らしてしまい、ラヴィアに不思議がられていた。

……そして、野性のモンスターに出会うことなく、3人はティスカヴシティに着いた。そこは、リポーテルタウンに比べると、スーパーや駅等があって、そこまで田舎ではなかった。

そして、この街で1番大きな建造物……ティスカヴドームに3人は足を踏み入れた。

ヴェントさんによると、トーナメントは1週間に1度のペースで行われ、今日が調度その日らしいのだ。

「いらっしゃいませ、ティスカヴドームへようこそ」

受け付けで、女の人2人が言った。

「今日は出場ですか？それとも観戦ですか？」

3人は迷うことなく、声を揃えて言う。

「「「出場です」」」

「では、出場するクラスを選んで下さい」

そう言って、1人の女の人が何か書かれた木製のプレートを出した。

……何が書いてあるのかさっぱりわからない。

「あの、僕等、初めてなんですけど…」

リークが代表で言う。

「そうでしたか。では最初から順に説明していきますね。どんな形でも、出場する場合、お金を頂きます。そして、クラスによって、エントリーする人の強さが違うのです。Ｅクラスが１番お手軽な出場条件で、３０ｕで強さも初心者向けです。そしてＤクラスが５０ｕ、Ｃクラスが１００ｕ、Ｂクラスが３００ｕ、Ａクラスが５００ｕで、お値段が高くなるほど、出場者の強さが上がっていきます。そして、Ｓクラスは、１０００ｕと２ｔを頂きます」

３人は一気に話されたことを一生懸命に覚え込む。

「じ、じゃあまずはＥクラスでよくない？」

すぐにシステムを理解出来たラヴィアが言う。

「……う、うん、いいんじゃないか、なあシト？」

「え？……あ、ああ、いんじゃね？」

シトはまだ考えている様子だ。

「では、お１人様１枚ずつ、エントリーチェックの用紙をご記入下さい」

そう言って、女の人が３枚の紙を取り出した。そこには、名前や年齢、住所等を記入する欄がずらっと並んでいた。

「うわ……これ全部書くんだ……」

シトがそう漏らすと、女の人が応えてくれた。

「あ、その用紙の記入は初回だけで、次からはその紙を見せるだけで大丈夫ですよ」

「そっか…よかった…」

シトはホッとしたが、いきなりドーム中に鳴り響き始めた鐘の音に3人共びくっとした。

「あ、そろそろバトル開始ですよ。１０分後に始まります。この紙はこちらで預かっておきますので、ここを出る際に、お引き取り下さい。それでは、このカードキーを持って、皆様４２室、４３室、４４室でお待ち下さい」

そう言って女の人が、それぞれにモンスターのカードとほぼ同じくらいの大きさのカードキーを渡した。

ボォォォォン…ボォォォォン……

さっきより大きな鐘の音がした。ティスカヴトーナメント第1戦の始まりだ。

［さあー1週間に1度のイベント＞ティスカヴトーナメント＜の始まりです！！！！今日も皆さんによる熱い死闘が期待出来そうです！！！！］

天上の無い、日光のさすステージには実況の声がすでに鳴り響いている。

［さて、今日もランダムに決められた１から６４までのエントリーナンバー！！！！最初に熱い戦いを繰り広げてくれるのは……１２番と４２番の選手！！！！］

そんな……。

シトは唖然とした。４２番は……自分だ…。

（そんな…１番最初だなんて……。……いや、順番なんて関係無い。ただ勝つだけだ）

そう思い、ステージにあがる。相手も自分と同じくらいの男だ。

「トーラ、召喚！」

「リフェスタ、召喚！」

［おおっと、まずは４２番のシト選手が１対１の流れを作ったあ！！！！］

相手のモンスターは、まるで光るてるてる坊主のようだった。

「いけ、陽珠＞シャインボール＜！」

リフェスタと呼ばれたモンスターが空中で体を横に揺らすと、光る玉が現れ、トーラに向かって飛んできた。だが、避けられない程速い訳でもない。

「トーラ、避けろ！そのまま突っ込め！」

スピードの遅いトーラでも余裕を持って避けられた。そしてそのまま剣を構えてリフェスタに突っ込んでいった。

「うわ…リフェスタ！光盾＞シャインシールド＜！」

リフェスタは、剣を振りかざしたトーラの目の前に、光る円盤を出現させ、攻撃を防いだ。

「く…やるじゃんか…」

「負けないよ、リフェスタ、陽珠＞シャインボール＜！」

今度は一気に６つも光球を放ってきた。

「聖域飛沫＞サンクチュアリ・スプラッシュ＜！」

飛沫が上がる。光球を全て弾き、水飛沫で相手の視界が奪わるている間に、トーラがリフェスタを切り付けた。

［ああーっと！！！！１２番のセム選手、モンスターのリフェスタが切り付けられ、破壊されました！！！！このバトル…４２番のシト選手の勝利です！！！！］

実況が叫ぶ。まずは１勝か…。電子財布を見ると、ｕが６０増えている。つまり、現在の所持金、３０３０ｕだ。

そして、やはり目指すものは……優勝！

第8話：　大会（後書き）

モンスター名：リフェスタ

光と闇が交錯する世界。そこでは気の遠くなる程の時間をかけて、現在でも光と闇は戦いを続けている。リフェスタもそこで音もなく壮絶な死闘を繰り広げるモンスターのうちの一種。そして、この世界で戦い続ける光のモンスター達は例外無く、周りの明るさに比例して、技の威力が増す、という。

技：陽珠＞シャインボール＜

光球を放つ小技だが、周りが明るい程威力が増す。また、スピードは遅いが、1度に出現する光球は1つとは限らない。

技：光盾
＞シャインシールド＜

光る円盤を出現させ、敵の攻撃を防ぐ防御技。周りの明るければ明るい程、円盤の硬度が上がる。

第9話：　言葉

ここのトーナメントは、１回で合計６４人が３２人ずつの２ブロックに分かれて、両ブロックの優勝者が最後に戦う形となっている。

そして、今は……。

準々決勝。３人共勝ち残っている。シトとラヴィアがレッドブロック、リークがブルーブロックだ。

残っている人数、８人。

「あん時は負けたからなー、今度は覚悟しろよ！」

選手の待ち合い室を繋ぐ廊下でシトとラヴィアが話していた。２人は次のバトルでは当たらないが、お互い準決勝進出を果たすつもりで会話しているのだ。

「えー、次も負けないよーっだ！」

「言ったなこんのやろー！」

ラヴィアがにこにこしながら、剥きになんないでよー、と言う。

ボォォォン……ボォォォン……

「「！」」

「……それじゃあ……」

「……うん、頑張ろうね……」

急に真剣な表情になる2人。お互いが戦う為には、ここで負ける訳にはいかないのだ。

「さあ、勝ち残った8人の戦い！！！！一体どんなバトルを繰り広げてくれるのでしょうか！！！！次の戦いは42番と57番です！！！！」

また自分が最初か……、と呟きながらステージに上がるシト。その間、さっきまで話していたラヴィアと、ブロックが違うために会えなかったリークのことを想っていた。

「やあ、僕はリルグだよ。よろしくね」

ステージに上がって、いきなり相手が名乗り、手を差し出してきた。

「え……あ、ああ、俺はシトだ。よろしく…」

「うん。じゃあ早速やるか……グリオーネ、召喚！」

「あ…トーラ召喚！」

シトは一瞬怯んでしまった。

相手の…リルグのモンスター、グリオーネは、右手にかなり長く、かなり細い剣…レイピアを構えた人型の鳥のようなモンスターなの

だが…＞人型の鳥＜ってすごくわかりにくい……要するに、全体が人型で、顔や肌、足等の細かい部分が鳥なのだ。それだからか、両手はあるが、背中には大きな白い翼が生えている。

「いくよ、グリオーネ……青風＞マリンガスト＜！」

グリオーネがばさっと翼を動かし、飛行する……といっても、地面から少し浮くだけだが。そして、レイピアを軽くひゅっ、とこちらへ向けて動かす。

！

ぶわっっ！

風圧が……！

一気にシトとトーラは、突風のような一瞬の強風で後方へ吹っ飛ばされた。

「っ……！……強い……！」

ぼうっ…！

カードが青く光った。突然だった。シトが一瞬トーラを見ると、トーラはすぐに分かるくらい怒りに満ちた顔をしていた。

反撃……！

「潤水貫剣＞モイスン・ブレード＜！」

トーラが持っていた剣を頭上に掲げた。すると、青いエネルギー体のようなものがヴォゴヴォゴと剣に集まってくる。そして、最終的に、青いエネルギー体に包まれたトーラの剣は、シトの身長３人分くらいにまでなっていた。そして……

「行けぇ！トーラ！」

グリオーネに向かって剣を振りかざした。

「……グリオーネ、翡翠旋風＞ジェイド・ボルテックス＜！」

グリオーネの剣に竜巻が巻き付き、今のトーラの剣と同じくらいの大きさになった。

２本の大剣が……ぶつかった……！

ギィィィン……！

……トーラは、地面に仰向けに倒れている。グリオーネは剣を下ろす。

……負けた……。

「……これはっ！！！！！４２番のシト選手、モンスターのトーラが一騎打ちに負けてしまった！！！！５７番のリルグ選手、準決勝進出です！！！！」

「くそ……トーラ……弱えよ……」

準決勝に進出出来なかった、ラヴィアと対戦出来なかった悔しさを、

トーラにぶつけてしまった。
トーラは一瞬驚いた表情をして、消えた。

「シト！なんでトーラにあんなこと言ったの！」

バトルに負け、ティスカヴドームの受け付けの側にあるソファに座って、3人は話していた。あれから準決勝進出したラヴィアも、決勝進出したリークまでが、リルグに敗れ、リルグが優勝したのだった。

「あれは……つい……」

「つい、じゃないよ！モンスターは人の言葉がわかるの……って、今は関係無いや…とりあえず、シトがトーラにああ言ったのがいけないんだから！」

「シト……君は、自分の負けを、トーラのせいにするような、そんな奴だったのか…？」

…暫くの間……。

「俺は……っ！」

いきなりシトがソファから立ち上がり、出口に向かって駆け出した。
後ろからラヴィアの声がする。

「モンスターをそんな風に扱うのなら、シトはカードを持つ資格な

んてないよ」
抑揚の無い声で、言い放つというよりかは1人呟く感じにラヴィアが言う。
シトは一瞬立ち止まったが振り向かず、そのまま駆けていった。
「！…シト！」
「いいよ。暫くほっとこうよ。頭冷やしてくるでしょ」
腰を浮かせ、シトを追おうとするリークを、さっきと同じ声でラヴィアが止める。
「そんな……」

もう陽が暮れかかっている。シトはどこをどう走っているのかわからないが、とにかく走っていた。忘れる為に……。自分でも忘れようとしているのがずるい、と思う。が、いい事なのか悪い事なのか、さっき自分が言ったこと、そしてその時のトーラの表情は、頭からこびりついて離れない。
自分が悪いことは本当は分かっている。けど、認めたくたい。
……ありがちなパターンだ。
こういうの、本やテレビで何度も見たことがある。
けど、実際自分がその立場になってみると、悔しい程によくわかる感情だ。

この自分勝手に作り出した矛盾。
自分のずるさから生じる矛盾。……憤りを感じる。この思い通りにいかない矛盾が……いや、＞矛盾＜と言うのも自分のずるさだろう。＞矛盾＜ではなく＞現実＜だ。自分がトーラに酷いことを言ったのは＞現実＜。自分がずるいから＞矛盾＜が生じる。

が、まだ現実を受け入れるのに時間はかかりそうだ。

走りながらそんなことを考えていたシトは、大分冷静になってきた。

そして、自分が走り過ぎて疲れていることに気付き、立ち止まった。ティスカヴシティの都会部分から大分離れてしまった。いつの間にか道は舗装されていない一本道に。左右は木々に囲まれている。そして正面には……大きな塔が見えた。

「……来たみたいだな。いいか、ロズビート、ランベイル。全力を出すんだ。だが、殺してはならない。貴重な存在だからな。が、万が一お前達が負けた場合……Ｒの元へ報告を入れろ。いいな」

「「はい、Ｖ様！」」

……シトに、現時点では高すぎるハードルが用意された。

第9話：　言葉（後書き）

モンスター名：グリオーネ

＞疾風の隼＜と言えばすぐに分かる程、その強力な力を世に知られた風属性モンスター。グリオーネの握るレイピアが生み出す風に対して、動かないでいられるものはない、と言われるまでに強力。また、グリオーネが空を飛ぶ姿は非常に美しく、美術作品等によく登場する。

技：青風
＞マリンガスト＜

レイピアを軽く振って突風を起こす技。直接的なダメージは得られないが、相手の自由を奪うことが出来る。

技：翡翠旋風
＞ジェイド・ボルテックス＜

レイピアに巨大な竜巻を巻き付け風の大剣へと変化させ、敵を切り付ける技。かわされれば隙は大きいが、ヒットすればかなり強力。

第１０話：　絆

「ちょっとあんた、どこ行く気だい！？まさかこのレグナタワーに入る訳じゃないだろうね！？」

なんだこの塔は、とシトがまじまじと見つめていると、木の陰から太ったおばさんが出てきて、いきなり塔を見ているシトに向かって叫んだ。

シトがぼーっとしていると、もう1度叫ぶ。

「……そこの塔には近づいちゃいけないよ！聞こえているのかい！」

さっきから走り過ぎたせいか脱力し、放心状態だったシトははっとした。

「…え！あ！は、はい！……すみません、この塔なんなんですか…？」

「なんだいあんた、知らないのかい。ここはレグナタワー。悪魔の塔だよ…」

「悪魔の……塔…？」

「あたしも名前は忘れちまったんだけどね、この国の首都であるヴィスレイにも、何とかタワーってばかでかい塔があるんだよ。このレグナタワーはそこの支部さ」

「はあ……でも、悪魔の塔って……」

「この塔の中の誰がやってんのかは知らないけど、野性のモンスター捕まえては生物実験してるんだよ。ま、タチの悪いことに最近は人様のモンスター盗んでまでそんなことやらかしてるらしいけどね」

「そ…そんな……生物実験だなんて…」

「あたしもこの中にいる連中は頭がおかしいと思うんだがね。…だからこの塔には近づいちゃだめなんだよ！」

おばさんは思い出したようにシトに注意した。が、シトは聞く耳を持たない。

「この中にいる奴等……全員倒せばそんなことはなくなるんだよな…」

「何を……！おやめ！何しろ連中は巨大な組織の中の1部分だ。変なことに首突っ込むと痛い目にあっちまうよ！」

「俺が……倒す……」

「……！……あんた、なんでそんなことするんだい？」

声音を静めて、急におばさんが聞いてきた。

「俺は…トーラを…相棒に酷いことを言った……だから……」

おばさんは、しどろもどろになっているシトを暫く見つめて、そして言った。

「……あんたさ、レグナタワー、行ってみたらどうだい？」

「……え？」

「……あたしの夫は冒険家でね。いつも無鉄砲で危なっかしかったが、それでもあたしは楽しかったよ。でも、１年前に１人で出かけてから、ずっと行方知れずさ。それからあたしは冒険を嫌うようになった。危ない橋渡りはしなくなった。でも、この前１４歳になった息子が旅に出るなんて言い出してね。それはもう怒ったわよ、あんたは母ちゃんを不安にさせて楽しいかっ、てね……でも、冷静になって考えてみてわかったんだ、あたしゃ臆病な女になったもんだねってさ」

シトは黙っておばさんの話しを聞いている。おばさんの息子と自分がかぶって見えるような気がしてきた。

「初めてのことに挑戦しない臆病さをあたしはこの１年間で作っちまった。でも、あんたは違う。目が輝いてるからね。若いうちはなんでもやっておきなさい。そしていい事と悪い事を体で覚えるのよ。あんたなら出来るさ。結果はどうであれ、レグナタワーに入るのは駄目だとは言わないよ」

「……」

「ただし！一晩待つけど、それでも戻ってこないようなら、あなたの住んでいるところに連絡をとるわ」

「……！……ありがとうございます……！」

シトは名前と連絡先をおばさんに教え、中へと進んでいった。

「気をつけて行くのよー！」

「シト、どこ行ったんだろ……大丈夫かなぁ……」

夜、ラヴィアと別れて1人で宿舎に戻ったリーク。シトのことは一応ヴェントさんに言っておいたが、やはり心配でならない。

じっとしていても、ただ気持ちは焦るばかりだ。

でもなんであんなひどいことを……

……そういえば。

「ブレゼ……あの時の傷は大丈夫か？」

カードを見つめながら言う。

あの時……対リルグ戦の時だ。あの時、ブレゼの四重鎖力は全てかわされ、竜巻が巻き付いて巨大化された剣で倒されたのだ。ブレゼはその時、まともに喰らってしまった。

カードを見ると、イラストはそのままだが……。

「やってみるか……」

リークは宿舎を出ていった。

正面に取り付けられた小さい錆び付いた扉を開けた。ギィィィ、と扉が軋む（きしむ）音がする。

中は……何もなかった。タイル張りの床が、明かりもなく、冷たく感じる。だが……。

シトはこの円柱形に造られた建物の壁にそって、やっぱり錆び付いている、螺旋階段を発見した。既に陽は暮れ、明かりもなかったので、最初入っただけではわからなかったのだ。

目で螺旋階段の先を追う。

（そういえば、外から見た時、もっと塔は高く見えたよな……それに、塔の先端は尖ってたのに平らだ……。……まさか！）

シトは螺旋階段目掛けて走り、そのまま駆け上がっていく。そして、螺旋階段が地面と水平になり、吹き抜けのように、階段が円を描くように、吹き抜けのようになった。

シトは走りながら上をよく見る。そして……あった。抜け穴が。

そう。シトが直感したものは、隠し通路を通って最上階へ行ける、というものだった。常識はずれだが、これはゲーム、架空の世界だ。これくらい普通に有り得るだろう。

低い天井についた四角い、人1人が調度入れるくらいの、くぼみ。

よく見ると、そのくぼみの手前に、鉄で出来たはしごが造られてい

た。

シトはそれを上っていった……

「ようこそ、レグナタワーへ」

はしごを上った先は、ラインサンド研究所が空き巣にあったような…そんな部屋だった。色々な書類やケーブル等が、小さな5つの机から溢れていて、床に散乱している。当然、そこには明かりがあるが、真っ白い電気を使っている為か、冷たい感じは消えない。

「シト。お前は優秀な奴だな。ケルヴォとクラモから身を守り通し、この場所も突き止めた」

はしごがあった場所とは反対側のところに、2人の男が立っていた。1人は、白い稲妻が大きく描かれた、真っ赤なTシャツを着て、下はジーンズなのだが…所々穴が開いていたりするのは、ファッションなのだろう。

髪形はツンツン立てていて、金髪。

手には白いリストバンド。かなり今風だ。が、もう1人は、何色、と言えないような色々な濃さの緑色がちりばめられた模様のセーターを着て、その上に1番濃い緑色で、ほとんど黒に近いような色の、温かそうなベストを着ている。下はクリーム色のズボンだ。花屋の店員なんか、すごく似合いそうだ。対称的だが…この2人が……

一倒すべき2人一だ。

「お前等が……生物実験を……！」

それを聞いて、赤のＴシャツを着た男が笑った。

「正義の味方、シト参上、か？」

さっきからずっとこの男が喋り続けている。緑のセーターの男は無言だ。

「……！」

「お前は一体ここへ何をしにきた？」

赤の男が薄ら笑いを浮かべながら、聞く。

「…相手なんて、誰でもいい…」

「へぇ…面白そうじゃんか…ま、いいや、久しぶりの来客だ。楽しまないとな…なあ、ロズビート」

緑のセーターの男は無言で頷く。

「そんじゃ…ケルヴォ召喚！」

「……コプト、召喚……」

……！２体！

……でも……。

「…トーラ召喚！」

「おいおい1体だけかよ、張り合いがねぇなぁ」

緑のセーターの男……ロズビートが召喚したコプトは、まるで童話に出てくる＞花の妖精＜だ。

全体が葉のようなもので出来ているからか緑っぽく、襟巻きのように首を淡いピンク色の大きな花びらが囲っている。背は小学生の低学年くらいだ。そして、もう1人の男が召喚したケルヴォは……

……！この木の形をしたモンスターは……ティスカヴトーナメントに行く前にヴィルタロードで戦った奴の内の1体だ。

「行くぜ…ケルヴォ！凶根津波＞タイドル・ルート＜！」

木のモンスター…ケルヴォが根を大量に張る。そして、その根がシトとトーラを襲う。

「トーラ……さっきは悪かった……ごめん……」

シトはトーラに頭を下げた。トーラは無反応だ。

「頼む……潤水貫剣＞モイスン・ブレード＜！」

トーラは全く動かない。根が迫る……！

ズガァァァン！

シトは攻撃を防げなかった……トーラは攻撃を防がなかった。

ズガァァァァン！

大量の根は、無慈悲にもシトとトーラを突き刺した。

「ぐ……がはぁッ！」

シトはカードを持っている右腕を突き刺され、トーラのカードを落としそうになった。

でも……！落とす訳にはいかないんだ……！

＞自分とトーラの信頼＜の為に……！

シトは今の1撃で既に身体のあちこちから出血している。だが、目は鋭く光っている。

「ト…トーラ……本当に…悪かった……許して……くれ……」

ボロボロの姿でシトは土下座した。ケルヴォがまた凶根津波を繰り出した。またしても大量の根がシトとトーラを襲う。

その時……トーラがシトに手を差し延べた。

意味がわからず、呆然とするシト。トーラはシトの手を握った。そして、ヴォォッと叫ぶ。

ブシャァァァ！

「……聖域飛沫＞サンクチュアリ・スプラッシュ＜……？」

トーラが自ら技を発したのだ。飛沫は、トーラと…シトをも囲んだ。が、この技では根を防げない……！

しかし、シトとトーラにダメージは無かった。その飛沫は、今までで1番大きいものだった。

「…トー…ラ……」

シトは間を空けて、言う。だがそれは、故意に造られた間ではない。

「やっと……繋がれた……」

シトは立ち上がる。

「やる…か……！」

ラヴィアは、フェイム宿舎で、カードを眺めていた。傍らには、電子マネーと同じくらいの機械が置かれている。だが、それではない。

「……遅いな……」

そう呟き、ラヴィアはため息をついた。

「トーラ、潤水貫剣＞モイスン・ブレード＜！」

トーラは、剣にエネルギーを溜めた。

（技…やってくれた…！）

溜まったエネルギーは、リルグと戦った時よりもかなり多かった。

「ケルヴォ！根壁＞ベリアー・ルート＜！」

ドキバキッ！

床に張った根でケルヴォとコプトの前に壁を造る。

だが、トーラの潤水貫剣は、根壁を粉砕した。剣は2体の真ん中に振り下ろされ、誘爆で2体はダメージを受ける。

「へぇ…こいつの壁を壊すとは……やるねぇ…」

まだ2人は余裕の表情だ。

「でも、ここからが勝負だぜ……ロズビート！」

その言葉にロズビートが反応する。

「ふぅ…やっと出番か。コプトー。花粉霧舞＞ブラッサム・ミスト＜」

第１０話：　絆（後書き）

モンスター名：ケルヴォ

ジレイルタワーが、木と獣の魂との融合に成功した。今まで神経融合は、ジレイルタワーの技術を持ってしても不可能とされていたが、ある獣に＞木の力＜を感じ、迷わず毒性の強い木と融合させ、＞Ｋｅｌｖｏｕ＜を誕生させた。

技：根壁
＞ベリアー・ルート＜

地面に根を張って、自分の前に根を生やし、壁を作る防御技。

技：凶根津波
＞タイドル・ルート＜

根を張り、それを相手に向かわせ、突き刺す技。範囲が広い為、避けるのは困難。

第１１話：　結束

コプトは、その妖精のような身体を振る。すると、黄色く光る粉が、キラキラと大量に発生し、コプトが両手を広げると、その粉がこちらへ飛んできた。

「ランベイルも…お願いねー」

「ああ、わかっているさ」

赤Tシャツの男……ランベイルがにやりと笑った。

「もう1発！凶根津波＞タイドル・ルート＜！」

また根がシトとトーラを襲った。

「大丈夫だ…トーラ……聖域飛……！？」

身体が……動かない……！？

なぜかシトとトーラの動きは突然止まり、声を出すことも出来なくなった。

（……！そうか…あの粉……！）

コプトの放った粉が、自分達の動きを封じているのだ……シトは直感で、そう思っていた。

グガァァァン！

シトとトーラは、またしても大量の根の餌食となってしまった。

「これで終わりかなー……何！？」

ムクッ……。

倒れているシトとトーラは、ボロボロになりながらも、立ち上がろうとしている。

「俺達は……負けない…！」

ぽうっ……。

！

シトは慌ててトーラのカードを見た。だが、カードは光っていない。

「ヒャハハハハッ！こんなとこでケルヴォが覚醒するなんてな！」

シトが驚いてランベイルの方を見ると、彼の右手……ケルヴォのカードが青く光っている。

「運が悪いねお前。いや、1番最初に見れるんだからラッキーなのかもな……毒蔓襲竜＞シーラス・ポイズン＜！」

「遅い……。時間かかりすぎだって……」

フェイム宿舎の部屋で、ラヴィアはいらだたしげに呟いた。

バキバキバキッ！

凶根津波のように、大量の蔓（つる）がシトとトーラを襲う。

「そろそろ終わりだね……花粉霧舞＞ブラッサム・ミスト＜」

コプトはまたきらきらと光り輝く粉を撒き散らし始めた。

「聖域飛沫＞サンクチュアリ・スプラッシュ＜！」

「ふ……遅いよ……何！？」

ドゥゥン！

「なんで……」

シトとトーラを囲んで上がった水飛沫を見上げて呆然とするランベイルとロズビート。

「相手の攻撃パターンが読めていれば、相手より早いタイミングで技を出せる……か。やるな」

ジレイルタワーのモニター室で、ヴェナードと金髪で色白の女性、そして色黒の大男が話している。

「シト＝クランヴァート。いいわね、確かに力を感じるわ。まだその力は芽生えたばかりみたいだけどね」

「まぁな、シトの力は最近突然リポーテルタウン付近で発覚されたもの……つまり初心者だからな。だからお前……フロートラが相手をするまでもない。ここは俺に任せてくれよ、ガンタックスもいいだろ？」

「……これは共同任務だからな。誰がやろうと見返りは俺達全員で受ける。好きにしろ」

「ははは、相変わらずお固いことだな」

ドォォォン！

「おっと…あいつらもう終わりかな…」

モニターを見ると、トーラが潤水貫剣で毒蔓襲竜の蔓を薙ぎ倒し、ケルヴォとコプトの２体に突っ込んでいっている。

「ま、これは実験程度だからな。ちゃんと結果はＲに報告させるし」

「あら、Ｒってなぁに？」

「いやー俺も抜目がないねー！……スパイを入れているからな、あっちには」

「ハァ、ハァ……やるな…技の連携を読みやがったとは……だが……お前の目的がなんなのかは知らないが……こっちの情報は渡さないぞ……」

潤水貫剣の誘爆でダメージを受けたランベイルが、そう言い終わるや否や、ポケットから赤いスイッチを取り出した。そして、そのスイッチを押した。

ヴィィィン……パシュゥン……

突然この部屋にあった全てのコンピュータの画面が暗転した。

「クッ……さすがV様のお眼鏡にかなったやつだ……シト…お前の名前…覚えとく……」

そう言って、ランベイルはカードを取出し、1度戻したケルヴォをまた呼び出した。

「ケルヴォ…毒蔓襲竜＞シーラス・ポイズン＜！」

バキドキッ！

ケルヴォは壁に穴を開け、2人はそこから飛び降りた。

第１１話：　結束（後書き）

モンスター名：コプト

花の妖精――ヴァニリーン大陸のある特定の地方にだけ伝わっている、有名な伝説の中に、〝薔薇（ばら）の紅（あか）に手を染めた時、その者の身体はコプトによって蝕まれ、骨も残らず溶かしてしまう〟というのがある。これを骨組みに、各地に何パターンか違う伝説が語られているが、ジレイルタワーの支部のレグナタワー周辺の地域に伝えられた伝説を元に、人工的にコプトを創り出した。

技：花粉霧舞

＞ブラッサム・ミスト＜

身体を瞬間的に硬直させる効果を持つ花粉をばらまき、相手の動きを封じる技。直接的なダメージは得られない。

第12話：　境遇

「……」

レグナタワーの隠し部屋…シトがランベイルやロズビートと激戦を繰り広げた部屋にある机に腰掛け、シトは1人でぼーっとしていた。白い電気や暗転したコンピュータが、部屋を寒々しく感じさせる。

シトは自分の腕を見る。皮膚がめくれ、血がじわじわと広がっていく。カードをポケットにしまう。

「……」

シトは少し長めの沈黙の後、深くはないけれど長いため息をつき、立ち上がった。

「父さん……」

部屋の電気は消してある。机に座り、机に付いているスタンドの明かりでカードを眺めるリルグ。

「僕は……カードを…カードで……どうすれば……」

リルグは、1年前に行方不明になった父のことを考えると、自然に涙が出てきた。リルグは声を出さずに涙を流す。

「……え？捕獲に失敗したの？……うん……うん……わかった。後は私に任せて。うまくやるから。……え？まだもうちょっと時間がかかりそうだよ。シト達を捕獲するのと同時に、彼等を成長させなきゃいけないしね。……うん、また連絡して」

フェイム宿舎の1室。ベッドに寝転がりながら、ラヴィアは機械ー
ー無線を、切った。

「あら……まだ起きてたのかい」

「……なんだよ……」

飲み物を取りに部屋を出たリルグは、調度家に帰ってきた母に会った。

「……あのさ……あんた……父さんのことだけど……」

母の口から『父さん』という言葉が出て、リルグの目付きが鋭くなる。

「あんだよ！父さんのことを放っておいて！」

「探しに……行ってもいいよ……」

「……！？」

「……あのねぇ、さっき……」

「おぅ！お帰り！どこ行ってたんだよ？」

シトがウェンバス宿舎に着くと、リークが宿舎の扉の前で待っていた。

「ああ……レグナタワーに……行ってきた」

「……何それ？」

「わかんない。でも、倒した」

「……え？」

「なんか知らないおばさんに聞いたんだけどさ……」

翌日――。

シトとリークは、朝食の時にヴェントさんに聞かされた＞火の神＜の話に興味を持ち、リポーテルタウンから少し離れたノイタウンのノイレイク周辺に行くことになった。

「おはよーっ！ラヴィアー！俺等ノイタウンってとこに行くんだけどー！一緒に行こーぜー？」

2人はフェイム宿舎の前でラヴィアを待った。すると、昨日の明るい表情とは全く違う、真剣な表情で彼女は現れた。

「あ・・・・・・おはよ！ごめん！今日は一緒に居られないや！用事が出来ちゃって！本当にごめんね！悪いけどまた誘って！じゃあ！」

いい終わるのと同時に扉が閉められた。

「「・・・・・・」」

彼女が無理して明るく振る舞っているのはすぐにわかった。それに、時間が勿体ない、とでも言うように一気にまくし立てていった。それとも、無理に明るくしているからあんなに速くなってしまったのだろうか・・・・。

2人は無言で顔を見合わせ、頭に疑問符を浮かべる。

「・・・・・ま、しょうがないか。じゃ、2人で行こうよ」

先にリークが沈黙を破った。

「あ・・・・ああ・・・・」

現実世界――。

『・・・・＞現場から実況中継です！オウロさーん！＜・・・・えー今も次々と世界中の人々がゲーム内に取り込まれていきます！これは大変なことになってしまいました！今、消失してしまった事がわかって

いる方の身内の方々が、ラインサンド研究所に駆け付けています！
えー今のところ、わかっているだけで消失した人の数は４３００人余りに達しています！それでは、まず最初に５０人のゲームプレイヤーを発表していきたいと思います！』

シミロも帰宅し、リントと２人でこのスクープを見ていた。

そして……。

「……え？」

５０人の中から、見つけてはいけない名前を、２人は見てしまった……気がした。

瞬間、シミロはテレビ画面に、ほとんど全力疾走とも言えるような小走りで近づく。

「……シ……シトォォォ！」

「…ん？なんか言った？」

「え？あ、いやノイレイクってどんなとこなのかなって思って…」

昼前――。シト達はシール・ラインという電車に乗ってリポーテルタウンからノイタウンへと移動中だ。ぼかぼかしていて、昨日の厳しい戦いが嘘のようだ。

それにしても……。

昨日、ランベイルが言っていた＞情報＜とは何のことだったのだろうか。『渡さない』と言う辺り、何か重要な、そして見られたくない情報なのだろうか・・・・。

考えてもうまくまとまらず、ふと顔を上げた。すると、そこにはのどかな町並みと、そのバックに大きな山が見えた。山頂から湯気が出ているように見えるが、あの山は火山なのだろうか。

「へぇ・・・のどかでいいな・・・ってかさっきから段々暑くなってきてね？」

暫く昨日のことで考えを巡らしていたシトは今までそのことに気付かず、火山を見てから自分の額に汗が浮かんでいることに気がついた。

「そ・・・そういえばそうだね・・・・」

リークは暑さに弱いらしく、走っている訳でもないのに、ハァハァと息を切らしている。

・・・・＞ＣｅａＲ　Ｌｉｎｅ＜というロゴが入った電車をバックに、シト達はノイタウンに着いた。

「はぁー暑っ！なんだよここ！」

「う・・・うん・・・流石火の神の都市・・・・だね・・・・」

リークはもうダウン寸前である。そして、２人共喉がからからだ。

2人は売店かコンビニか・・・とにかく水を探していたのだが・・・コンビニどころか、建物が全く見当たらないのだ。駅の改札を出たところから見えるのは、四角く網の目のように敷かれた道路と、その道路毎に区切られた土やアスファルト、そしてその区切り毎にある大きな蓋だけである。

「・・・・・なんだアレ？」

「・・・・・・・さぁ・・・・・・」

もうリークの声は消え入りそうな程小さい。

「とりあえず、駅員にノイレイクの場所、聞いてみるか」

シトはリークを半ば引っ張るような感じで、改札口の横にいる駅員の元へ歩きだした。

第１２話：　境遇（後書き）

こんにちは、魔狗羽です！
今回は新しいモンスターが登場しなかった為、モンスター紹介は無しですｆ＾＿＾；
「こんなモンスターやキャラがいたらいいな」
や
「ここをこうした方がよい」
等の希望がありましたら、どんどん言って下さい（＾＾ゞ勉強になりますのでｍ（＿＿）ｍ

第１３話：火山（前書き）

お久しぶりです、魔狗羽です。長い間作品を放置してしまって、大変申し訳ありませんでした。
色々事情はあったのですが・・・これからはまた連載を続けていくことができます！どうぞ、これからもＣＲをよろしくお願いします。

第13話：火山

「あった！おいリーク！あったぞ！」

「・・・・・・・・・」

ダメだ。完全に熱で会話出来なくなっている。

まあ、無理もないか・・・・・こんなでかい火山の火口の近くじゃ・・・・。

駅員に『＞火の神＜として奉られているモンスターがいる場所』を聞いて、それに駅員が応えた時、リークは本当に倒れそうになった。

「それならあのノイレイクの近くですよ。・・・ああ、ノイレイクはあの火山の中腹にあります」

・・・・・。

因みに、この街ではあまりの気温の高さに、普通に建てた家だともたないので、皆地下に住むスペースを設けて『家』としているのだそうだ。この街では、そんなに建築技術が発達していないのだ。

「つーか・・・・中腹どころかほとんど頂上じゃねーか・・・・」

あの駅員・・・これで目的の場所にたどり着けなかったらマジでキレ

るぞ・・・。リークを担いだシトが熱さでやけくそになってそんなことを思い始めた時、ようやく白い湯気が漂う熱い湖――――ノイレイクが視界に入ってきたのだった。

そしてシトは目を見張った。『＞火の神＜として奉られているモンスターがいる場所』を見て。

あまり大きくはない真っ赤な鳥居。その奥に静かにたたずむ木で出来た家。これは・・・神社？それとも道場？

まぁ・・どんな場所であろうと、中に人がいるなら冷房なんかが利いているだろう。とりあえず入ってみるか。

「すみませーん！誰かいますかー！」

シトの体力ももう結構限界で、叫ぶだけでもつらかった。

すると返ってきたのは、この場所にぴったり過ぎる程の体育会系の男の声だった。

「んー！誰だー！また挑戦しに来たのかー！俺はいつでも大丈夫だぞー！」

・・・・・・挑戦？

「あ・・あの・・・とりあえず・・・中に入れて下さい・・もう・・限界です・・・・」

「？なんだ子供か・・ってお前達！顔が真っ赤じゃないか！早く俺の

家にあがれ！」

声通りの巨漢が現れ、シト達を担いだ辺りで、シトの意識は消えた――。

「・・・ったく、なんの準備もなしにこんなとこまで登ってくるなんて・・自殺行為だぜ！」

気が付いたらシトとリークは、冷房の利いた畳の部屋に寝かされていた。

「・・・ここは？」

リークから目覚めた。・・・まぁ、火山を登り始めた辺りから意識が無かったリークにとって、ここがどこで自分がなんでここにいるのかは全くわからないだろう。案の定、隣で寝かされているシトと心配そうに顔を覗き込んでくる巨漢を見てただただびっくりしていた。これでは最初にこの世界で目覚めた時と同じだ。

「おぅ、起きたか。お前、名前は？」

いきなり巨漢にそう話し掛けられ、リークはしどろもどろになりながら答えた。

「え・・・・・り、リークです。あの・・あなたは・・・？」

「おぅ？・・俺はメリアだが・・・なんだお前達・・・この俺に挑戦しに来たんじゃあないのか？」

「挑戦‥‥？どういうことですか？俺達は＞火の神＜とされているモンスターの話を聞き、ノイレイク辺りまで来ていたのです‥‥が‥‥‥‥！ここは何処です？俺ずっと気を失ってたみたいで‥‥」

「ほう‥‥＞火の神＜、ねぇ‥」

巨漢――メリアはにやり、と笑った。

「安心しろ。そこは‥ここだ。あいつがお前担いでここまで来たみたいだな」

そういってメリアはまだ倒れているシトを指差した。

「来い。案内する」

「え‥‥シトは‥‥？」

「もうすぐ起きんだろ。さ、いくぞ」

メリアは有無を言わさぬ口調で言い放ち、立ち上がった。

第１３話：火山（後書き）

今回も新しいモンスターは登場しなかったのでモンスター紹介は無しです・・・・。
因みに、この後書きでしばしば登場するジレイルタワーは、いずれ物語に深く関わっていくことになります。

第１４話：繊細（前書き）

こんにちは、魔狗羽です。かなり字体が変わっていると思いますが、ご了承下さい。

第１４話：繊細

メリアに連れられて、俺は木製の道場のような広い部屋に行き着いた。ここは熱気がむんむんだ。
「あの・・・それで＞火の神＜は・・・？」
メリアは立ち止まって、ゆっくり振り向いた。
「それは＞俺＜だ。俺には＞火の神＜――フォルドルの力が宿っている。当然のことだが俺は人間・・・だがフォルドルの力のおかげでモンスターと闘えるまでになった。＞火の神＜を見たいってんだったら・・・俺に挑戦するしかないぜ」
俺の手は無意識の内に腰にぶら下げたカードの袋に触れていた。因みにこれは今朝ヴェントさんが俺達にやってくれたものだ。
そうか・・・挑戦って・そういうことだったのか。
俺はもう一度、カードの袋に触れる。確かめる。感触を。俺は勝つ。シトなんかに負けてはいられない。
「それでは・・・お願いします」

『残念だったなラヴィア。メリアと闘うのはリークだそうだ』
昨晩の激闘でぼろぼろになったレグナタワー最上階。私は適当な机に腰掛けて、無線をことり、と置いた。
「何がよ」
『お前のお気に入りのシト君じゃなくて～』
私は無線を叩き壊しそうになる衝動を必死で抑える。
「ふざけないで。それで？わざわざ私をこんなとこに連れ出して、一体どういうこと？」
『いやいや・・・シトの破壊現場を実際にみてもらおうと思って。どうだ？』

「まぁ・・・確かに初心者離れした破壊力ね・・・トーラが攻撃よりも守備能力に長けたモンスターであるのにも関わらず・・・」
確かに私は少なからず驚いている。まだカードを始めたばかりだというのに・・・。
『そう。そしてここでの闘いによってシトは自分のモンスターとの信頼を得た。あのトーナメントでの＞お前の＜言葉。短期間でその人間の本質を見極められるお前の能力・・・ほんと、よくやるよな』
「そしてあのトーナメントに誘導したのは貴方・・・ってことね」
『そうそう俺とお前は最高のコンビだよ！だからシト君なんかに目移りはしちゃだめだぜ？』
またしても無線を壊しそうになる衝動を堪える。やはり私の精神力は強い、と自画自賛してしまう。代わりに頭の中でこいつをひねりつぶしておく。
「切るわよ？」
『はっはっは・・・』
全く。
『それで？お前はこのバトル、どう見る？』
この部屋で唯一壊れていないパソコンにライヴの画像が送られてくる。画面にはリークとメリアの戦闘シーンが写っている。
「私は・・・」

「おいおいこんなもんかよお前の実力はよぉ！」
ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！
いきなりのラッシュ。メリアの巨体からは考えられない程のスピードで迫ってきた。
「！ブレゼ避けろ！左だ！」
ヒュオッ・・・！
間一髪だ。危なかった・・・こいつの一撃はかなり利きそうだ。俺は

一瞬にして戦慄した。
「ブレゼ！四重鎖力＞カルテット・チェーンフォース＜！」
ギュオォォォォッ！
ブレゼの両手両脚の鎖がメリアに向かって伸びていく。
「しょぼい技だなおぃ！喰らえぇ！炎飛＞スピリッド・フレイム＜！」
メリアの身体から、本人の大きさと同じくらいの大きさの炎の球を繰り出した。伸びていく鎖とぶつかる・・・！
ボワァァッ！
・・・相打ちか・・・。俺は再度メリアに攻撃を叩き込むべく、メリアのいる場所を確認しようとした。・・・しかし・・・メリアの姿は無かった。
「はっはっは！上だぁ！いくぞ、神炎直下＞フレイム・クライム＜！」
上から、巨体に炎を纏ったメリアが、襲い掛かって来た。
「・・・ぅ・・・うわぁぁぁぁ！」

「・・・私は、行けると思う。メリアは見た目先行の派手な大技ばかり使う。対してリークはシトと違って繊細な行動が出来る、そしてそれはモンスターにも反映される。使っている度合いが多ければ多い程、よ。それに、どちらが優勢であろうと、『この勝負の決着はつかない』」
『よくわかってるじゃないか。大体あのままじゃあメリア自身の体力が持たない・・・』
「リークは、勝つわよ・・・！少なくとも闘っている間は・・・！」

第１４話：繊細（後書き）

モンスター名：メリア＝コセロイン＞フォルドル＜

火の神を司るフォルコドの力を、ジレイルタワーの協力、又は実験として与えられた。炎属性にしては珍しい、打撃攻撃を得意としたフォルドルの力を得た彼は、炎を身に纏った突進系の技を好んで使う。

技：神炎直下＞フレイム・クライム＜：炎を纏い、相手を押しつぶす。

第１５話：考察

ボガァァァン！
「うわぁぁぁぁ！」
・・・結構：喰らった・・・・。でももし避けていれば・・・反撃は簡単だったはず。神炎直下のせいで出ている煙でよくは見えないが・・・あの技の反動はかなり大きいらしく、大分大きくのけぞっている。そういえば炎飛の時もだ。・・・もしかしたら・・・メリアの技はどれも、避けさえすれば簡単に反撃出来る・・・！？
「これで終わりだ！火炎陸王＞ブラスト・ダンク＜！」
ボワッ！
メリアは自分の両腕に炎を纏い、それを地面にたたきつけた。すると地面の二つの炎が俺目掛けて凄い速さで這ってきた。
・・・大丈夫・・・避けさえすれば・・・・。
実際、メリアはまたよろけている。・・・いける！
「ブレゼ！右に避けろ！・・・やってやる・・・硬鎖太撃＞メガハード・チェーン＜！」
ジャラジャラジャラジャラ！
両手足の鎖が一つに纏まって、空中へと真っ直ぐ伸びていく。
「はははは！どこに攻撃している！」
「お前のとこだっ！いけ！ブレゼ！」
グルッ！
「！？」
一つに纏められた四本の鎖が、空中でいきなり曲がり、方向を変えた。そう。この技の最大の特徴。それは技を出してから一度だけ方向転換出来ることだ。油断していてまるで防御や回避の準備などしていなかったメリアは驚愕の表情を浮かべた。
ズガァァァァン！
「・・・勝ったか・・・？」

「……ぅうっ……やるな……。…だが……俺は負けない……」
ボロボロになりながらそう言い放つメリア。後は楽勝かな……と思ったその時――
ズドォォォォォォォォォォォォォォン！
さっきの硬鎖太撃とは比べようもないくらいの大きな衝撃がこの建物を包んだ。吹き飛ぶ扉、燃え盛る部屋……って…シトが危ない！まだ寝てんのか、あいつは。

ズガァァァァァン！
……ん？
……え？何？ここ？
今、ズガァァァァァン！て……。
なんか……いきなり熱く……。
ボワァッ！
目の前で踊る炎。まるで生きているようだ……ってえぇぇぇぇぇぇぇ！
「な……何だここ！……っ！トーラ、召喚！火を消してくれぇぇぇぇ！」

シュルシュルシュルシュル！
煙の中で縄に巻きつけられるメリアの姿が見えた。……縄？
そして、あっという間にメリアは何者かに連れ去られてしまった。
……あれ？地響き……？
ドォォォォン！
うわぁぁぁぁぁ！

「潤水貫剣＞モイスン・ブレード＜！」
とりあえず、この目の前の炎を何とかしなければ。
ドォォォン！
・・・ガラガラッ！
天井が落ちてきた・・・・。
ヤバい！
「・・・っく！ゼフィン召喚！水柱囲撃＞シューティング・ドーム＜！」
カァッ！・・・・バァァァン！
天井が吹っ飛ぶ・・・・！

ドォォォン！
・・・ガラガラッ！
炎のせいで床が落ちた・・・・！・・・・てか俺も落ちる！
その時・・・・。下の方から一瞬光が漏れて――
バァァァン！
わぁぁぁぁぁ！吹っ飛ばされるぅぅぅ！

・・・た・・・・助かった・・・・。
天井が吹っ飛んだ瞬間、上の方で悲鳴が聞こえた気がしたが、今は自分のことで精一杯だ。
それより・・・・何が起きたんだ・・・・？
俺は瓦礫の山をジャンプしながら上へと上がる。どうやらさっきの

ところは地下だったみたいだ。
・・・ここは・・・あの・・建物・・。
なんでこんなになってるんだ？

第１５話：考察（後書き）

すみません・・・今回も無しです。
お詫びに、次の回ではモンスターをたくさん出すことを約束します！

第１６話：　宣戦

・・・ここはどこ・・・？
俺は今・・・寝てた？いや・・一瞬だけ気絶してたような・・・・・。
で、ここどこ？
・・ヒュゥゥゥ。・・・・
風を・・・感じる・・・重力を感じない・・・俺は・・鳥になったのか・・・？
・・・重力を・・・感じ・・ない？
眼を開く。そこに広がっていたのは、青々とした森の光景で、自分はその光景を見下ろしてる訳で・・・・・・・・
・・・ぅわあぁぁぁぁぁぁぁ！！
ドォォォン！！

・・・ここはどこ・・・？
俺はなんで寝てた？確か・・・暑さで倒れていたような・・・・・。
で、この状況は何？
そういえばメリアは？リークは？今の爆発で吹っ飛んだのか？
・・キュゥゥン。・・・・
・・・動物の・・・鳴き・・・声？いや・・・動物ではなくて・・・・
・・キュゥゥン。・・・・
俺の目の前に現れたのは、くりくりした目の、小さい狐のモンスターだった。
「何だこいつ・・・？」
こんな瓦礫の山まで、何をしに来たのだろうか。
と、その時、遠くから女の人の声が聞こえた。
「大丈夫ー？」
すると、その女の人の声に反応して、狐のモンスターがよく響く綺

麗な声で鳴き始めた。
クゥゥゥン・・・クゥゥゥゥン・・・
煙のせいで視界は狭められているし、崩れた瓦礫で足場が悪くなっているにも関わらず、女の人は軽い足取りでこちらへ向かってきた。
「貴方がシト君ね。」近付いてくるにつれ、相手の容姿が段々とはっきりしてきた。腰まであるような金髪。瞳には冷たそうな…それでもどこか可笑しそうな笑みを浮かべていた。
「あんた……誰？」
その大人っぽいオーラに少したじろぐ。
「私はリディエ。さぁ、行きましょう」
どこに、と聞く前にリディエは来た道を引き換えしていく。
何がなんだかわからんが……とりあえず着いてこ…。

・・・いったぁ・・・
建物の謎の爆発で、ここまで吹っ飛ばされた俺は、見事に尻を打ちました。頭じゃなくてよかったぁ・・・。
でも、ここはどこなんだろう・・・？
見渡すと、そこには無数の木、木、木！木漏れ日が綺麗だけどそんなことを言ってる場合じゃない・・・！森の奥深くにほうり出されたみたいだ・・・。
さらに事態は悪化する。
バウゥルルルルルル・・・
周りから聞こえる嫌な声。
・・・・。
囲まれちゃったよ・・・。
俺の周りには、野性の牛っぽいモンスターでいっぱいでした♪・・・
あぁ・・・。

「はい、どうぞ」
俺は、山の麓(ふもと)にある小さな家で、リディエに出されたココアを飲んでいた。美味い・・・・！
「それで、シト君はどのくらい腕を磨いたの？」
唐突にそう尋ねるリディエ。それで、って言われても・・・・。
「あの・・・・あんた何者なんですか？俺、あんたのこと知らないし・・・・」
そう問うと、リディエの笑みが深くなった。その時、俺は戦慄を覚えた。
「そうねぇ・・・・貴方達を・・・・追う者？」
「？　は？」
「貴方達には才能がある。カードを使いこなす者としての。ジレイルタワーから直々にお願いがあって・・・・貴方達を連れてくるように。でも、今はまだその時じゃない。もう少し自分で経験を積んでから、ね。それまでは・・・・」
何・・だって・・・・？

第１６話：　宣戦（後書き）

モンスター名：センガーティオ

牛を実験体とし、ジレイルタワーが作り出した衝撃波系のモンスター。攻撃よりも、バリア等を使った防御系の技を多く使う。

技：波盾＞カータック・バリア＜

自分の周りにバリアを張り、身を守る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5372a/

-ＣＲ-

2010年11月6日14時10分発行